

Session V 『胆道』

16 コレステロールポリープを発生母地とした
早期胆嚢癌の1例

金子 和弘・若井 俊文・佐藤 良平
坂田 純・白井 良夫・畠山 勝義
味岡 洋一*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
同 分子・診断病理学分野*

症例は77歳、男性。2001年、検診で13mm大の胆嚢コレステロールポリープ(以下、CP)を指摘され経過観察となった。2007年1月に18mm、2008年3月には22mmと径の増大を認め、当科紹介となった。開腹下に胆嚢全層切除を施行した。肉眼所見は黄白色調、表面桑実状のポリープでCPと考えられた。組織学的所見では泡沫細胞の集簇で構成されるCPの一部に高分化型管状腺癌を認め、CPを発生母地とした胆嚢癌と診断された。深達度m、脈管・神経浸潤、リンパ節転移は認められなかった。

【考察】自験例ではCPとして長期経過観察されていたことより、CPを発生母地とした胆嚢癌と考えられた。CPの経過観察中に急速な径の増大を認めた際は、癌の発生も念頭におき手術を考慮すべきである。

17 胆嚢癌におけるリンパ節転移個数が術後遠隔成績に与える影響

坂田 純・白井 良夫・若井 俊文
金子 和弘・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【目的】胆嚢癌においてリンパ節転移個数と転移部位のどちらが予後指標として有用であるかを検討した。

【方法】R0切除された胆嚢癌124症例を対象とした。郭清はD2を基本とし、リンパ節転移個数別、転移部位別に治療成績を比較した。

【成績】51例がリンパ節転移陽性で、そのうち

20例が5年生存した。単変量解析で、リンパ節転移部位、転移個数ともに予後因子であった(各々 $P < 0.0001$, $P < 0.0001$)。多変量解析で、リンパ節転移個数は独立予後因子であった($P = 0.004$)。転移部位は異なった。転移個数が1個(5生率61%)および2-3個(同43%)の症例の予後は4個以上(同15%)より良好であった(各々 $P = 0.0077$, $P = 0.0410$)。

【結論】胆嚢癌ではリンパ節転移個数が独立予後因子である。

18 胆嚢管-1mm厚多列検出器型CT画像での正常所見

加村 毅・浦川 佳美*・佐藤 攻**
角田 和彦**・田島 陽介**
森 茂紀***・菅原 聡***
丹羽 恵子***
信楽園病院放射線科
新潟大学医歯学総合病院放射線科*
信楽園病院外科**
同 内科***

40列検出器型CT装置で撮像された連続する60症例(肝・胆道・膵疾患症例、胃切除例は除外)の空腹時の腹部1mm厚再構成造影CTにおける胆嚢管の所見を検討した。45例で胆嚢管が描出され、大部分の症例で同定が可能であることがわかった。描出された45本の胆嚢管のうち43本で胆嚢管内腔と思われる低濃度域が管状~数珠状に描出された。視覚的に胆嚢管壁は総胆管壁に比し29本で一部~全体が高濃度にみえ、総胆管壁に比し低濃度にみえた胆嚢管はなかった。また壁濃度の評価のため壁濃度中央値を考案し測定したところ、胆嚢管は総胆管に比し有意に高かった。胆嚢管壁が総胆管壁に比しやや高濃度にみえてもただちに異常とはいえず、読影上留意すべきと思われた。